先人に想いを馳せながら
丘の上で、北天を仰ぐ。
さあ、悠久なる時空の旅へ。

遥か昔に、この地に住んだ先人たちへの想いをかき立てられるメインラウンジ「回」。

何もない贅沢。
そして、あるがままの自然風景を。
原点に帰る旅を、サロマ湖で。

視界いっぱいに広がるサロマ湖の大パノラマ。贅を知る大人たちにふさわしい「ロイヤルスイート」。

鶴雅物語

～あなたを選んだ理由。恋の初心に戻る旅～

原因は、茶碗だった。

僕は、一人暮らしのときの癖で食器を洗うと、そのまま水切りかごに入れっぱなしにしてしまう。妻は、それがどうしても許せないらしい。何度も何年も同じことを言われ続けて、ついに昨夜、ケンカになってしまった。

幸か不幸か、ちょうど金曜の夜だった。今朝も妻は口をきいてくれない。テレビの音だけが虚しく響く室内。黙って本を読む妻。部屋着のままの僕。沈黙に耐えきれず不機嫌な妻の手をとって、ドライブへ出掛けた。

やっぱり沈黙の車内。ラジオから流れる能天気なパーソナリティが恨めしく思えてくる。妻は、黙ってスマホをいじっている。

「ねぇ…」

妻から沈黙を破ってくれた。しかし次の瞬間、再び僕は答えに窮する。

「どこに行くの？」

ああ、と生返事をしてしまった。実は、決めていない。あてもなく走っていくうちに、なんとかなるだろうと思っていた。そんな僕を見兼ねてか、妻が口を開く。

「ねぇ、あの頃によく行ってた〝あそこ〟に行かない？」

僕は黙って頷き、ハンドルを切った。

山間を抜けると目的地だ。でも陽はすっかり落ちて、景色が闇の中に隠れている。

「やっぱり間に合わなかったね。あの頃みたいに、またあの風景を見たいな…」

あの頃と変わらない彼女の真っ直ぐな瞳。この瞳に僕は恋をしていたんだ。

それはそうと今夜、どうしようか…。

「ねぇ。そこにある鶴雅なんて、どう？」今日初めて彼女が微笑んだ。

仲直りのドライブのつもりが、いつの間にか二人の想い出旅になって、僕らを原点に連れてきてくれた。今日は、ある意味で二人にとって特別な日だ。

「よし、そうしよう。でも、鶴雅って予約しないと泊まれないんじゃない？」

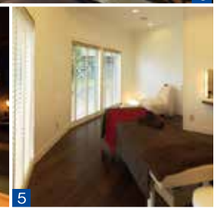
「大丈夫よ。車の中でスマホから予約しておいたから」

それから手をつないでホテルのエントランスをくぐった。

温泉と食事を愉しんだ後、穏やかなラウンジバーで他愛もない話をしながら寛ぐ。こんなに夫婦で話すことも久しぶりだ。お互いに好きな仕事を続けてきたけれど、その分だけ会話が少なくなって、言わなくても大丈夫と甘えていたことに気づく。

部屋に戻ると彼女が「カーテンを開けて寝よう」と提案してきた。不思議な提案だったので答えられずにいると、彼女はこう言った。

「目覚めたらすぐ私たちの大好きな風景が見られるのよ。素敵じゃない？」と。



①見て、香って、味わって美味しい品々を取り揃えた「オホーツクバイキング」
②日常を忘れ、心からリラックスを堪能できる「北天 坐忘の湯」
③専用の露天風呂と庭を設け、真の寛ぎを追及した「古の座」露天風呂付客室
④ゆったりと揺れる暖炉の炎に心を寛がせるラウンジバー「縄文」
⑤丘の上で味わう極上のひとときをスパトリートメント「ファウラ」で

北天の丘
あばしり湖鶴雅リゾート
Hokuten no Oka Lake abashiri Tsuruga resort

〒099-2421
網走市呼人159番地
TEL.0152-48-3211
FAX.0152-48-3220

サロマ湖鶴雅リゾート

〒093-0216
北見市常呂町栄浦306番地1
TEL.0152-54-2000
FAX.0152-54-2105

①心と体が大自然に溶け込んでゆく至福のひとときを「ワッカの湯」で
②オホーツクの魚介をはじめ山海の幸を存分に味わう「ラ・メール」
③美しいサロマ湖に抱かれ、その風景に魅了される「リゾートツイン」
④北海道限定の化粧品を使用したエステティックサロン「ラ・セレヴィス」
⑤アンティークスピーカー・パラゴンの音色に寛ぐオーディオコーナー